

「子グモの観察(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

(1) 子グモの大発生

クモ(蜘蛛)は、節足動物門、クモ綱、クモ目に属する「虫」である。昆虫と同じ「節足動物門」に属するが、肢が8本である。子どもたちにはあまり人気がなく、どちらかと言えば、嫌われているようだ。小学校の教材として扱われることも、ほとんどない。

クモ類の多くは、「卵のう」の中にたくさんの卵をうみ、そこから子グモが大発生する。孵化したばかりの子グモはあまりにも小さいので、私はほとんど無視していたのだが、ちょっと顕微鏡で観察してみようと思った。もちろん、教材化ができないかという「探究心」からである。



どうも、気づかないうちに、Zライトの笠の中に卵のうがあったようだ。ある日、次から次への子グモが降りてくる。

(2) 「流れ蜘蛛」と「流れ糸」

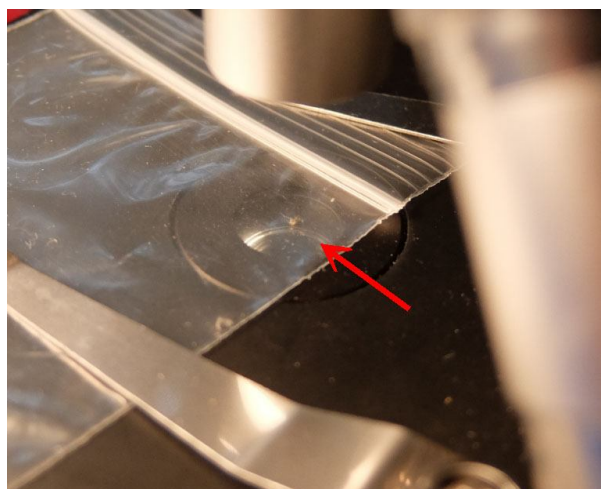
クモは自力で飛べないので、糸でぶらさがっているはずなのだが、糸は細すぎて、どんなに目をこらしても見えない。従って、子グモは空中に浮いているように見える。試みに、Zライトと子グモの間に指を通すと、子グモは指について空中を浮いている。その状態で指をフツと動かすと、糸は指から遊離して、しばらく子グモだけが空中を漂っている。

私はこの様子を見て、小学校の時に国語の教科書(高学年の説明文)に載っていた、クモの教材を思い出した。生まれたばかりの子グモは、糸の浮力で風に

載り、遠くまで飛んでいくと書いてあった。これを「流れ蜘蛛」と呼び、子グモが離れたあと、糸だけがたくさん飛んでゆく現象は「流れ糸」と呼ばれると書いてあった。私が観察した子グモも、屋外であれば、きっと「流れ蜘蛛」になるのだろう。

(3) 子グモを顕微鏡で観察する

子グモは糸にぶらさがっている時は、比較的じっとしている。しかし一旦地上(机上)に降りると、とたんに8本の肢で、猛烈な勢いで逃げようとする。野生の場合でも、子グモにとって「地上に落ちる」ということは、生死を賭した冒険なのだろう。



できれば生きたまま観察したいので、ぶらさがっている子グモを、チャック付きのポリ袋に入れて、そのままステージに載せてみた。この方法は意外とうまくいった。



確かにクモだが、ポリ袋の隙間でジタバタしていて、撮影してもブレてしまう。一回目は失敗だ。